

KENKYUSHA'S
NEW
ENGLISH-JAPANESE
DICTIONARY

YOSHIO KOINE

新英和大辞典

FIFTH EDITION

KENKYUSHA'S
NEW
ENGLISH-JAPANESE
DICTIONARY

YOSHIO KOINE

Editor in Chief

新英和大辞典

FIFTH EDITION



TOKYO KENKYUSHA JAPAN

COPYRIGHT © KENKYUSHA LTD. 1980

Previous Editions

COPYRIGHT 1927, 1936, 1953, 1960

KENKYUSHA'S
NEW ENGLISH-JAPANESE
DICTIONARY
研究社 新英和大辞典

第5版 初刷 1980年

4刷 1982年

編者代表 小稲義男

発行者 植田虎雄

発行所 株式会社研究社

〒162 東京都新宿区神楽坂1の2

電話(03)269-4521(代)

振替東京9-32260

本文組版 研究社吉祥寺工場

写真製版 株式会社近藤写真製版所

本文印刷 三英印刷株式会社

本文用紙 三島製紙株式会社

クロス ダイニック株式会社

製本 研究社製本株式会社

製函 株式会社加藤製函所

0582-11・025-1861

内部交流

S50/12 (京) (英・日6-2/384)

新英日大辞典 第5版 T002540

編 集

小	稻	義	男	竹	林	滋
田	桐	大	澄	安	藤	雄
小	西	友	七	寺	澤	雄
山	川	喜	久	吉	川	夫

編 集 協 力

東	信	行	小	川	繁	司	田	辺	宗	一
廣	瀬	和	太	田	宜	子	渡	邊	末	耶
児	玉	仁	下	田	弘	之				子
久	保	端	鈴	木	榮	一				

執 筆

安	藤	貞	雄	広	島	大	学	教	授	岡	富	美	子	青	山	学	院	大	学	教	授	
船	戸	英	夫	立	教	大	学	教	授	櫻	井	雅	人	一	橋	大	学	助	教	授		
羽	田	三	郎	青	山	学	院	大	学	笹	川	壽	昭	新	湯	大	学	助	教	授		
稗	島	一	郎	文	教	大	学	講	師	佐	藤	修	二	中	央	大	学	教	授			
東	瀬	信	行	東	京	外	国	語	大	清	水	あ	子	東	京	外	国	語	大	学		
廣	谷	和	清	都	立	杉	並	高	校	下	田	弘	之	京	大	学	助	教	授			
池	亮		彰	東	学	芸	大	学	助	篠	田	義	明	京	大	学	助	教	授			
乾	部	宏	一	元	東	京	外	国	語	獅	子	原	巖	早	稲	田	大	学	教	授		
磯	部	恒	薰	福	岡	大	学	教	授	須	賀	誠	三	独	協	大	学	教	授			
秦	井	迪	一	東	都	立	大	学	助	鈴	木	榮	澄	東	北	学	院	大	学	教	授	
苧	崎	仁	德	新	島	大	学	助	教	田	桐	大	滋	大	東	文	化	大	学	教	授	
河	玉	義	男	広	協	大	学	助	教	竹	田	正	道	東	京	外	国	語	大	学	教	授
川	稻	友	潔	独	協	大	学	助	教	竹	内	公	平	長	岡	工	業	高	専	助	教	授
児	西	端	士	元	上	智	大	学	教	田	辺	宗	一	元	香	川	県	立	高	松	高	校
小	保	淳	七	神	戸	市	外	国	語	田	澤	芳	雄	教	大	学	教	授				論
小	原	倫	郎	東	京	大	学	助	教	寺	正	次	郎	東	京	大	学	教	授			
久	瀬	好	弘	駒	場	学	園	高	校	辻	本	明	子	宇	都	宮	大	学	教	授		
栗	井	捷	三	上	智	大	学	教	授	塚	田	勝	稔	筑	波	大	学	助	教	授		
楠	村	弘	浩	立	戸	科	大	学	教	上	邊	末	耶	早	稲	田	大	学	教	授		
松	井	啓	二	神	古	屋	大	学	助	渡	岸	和	子	東	京	女	子	大	学	助	教	授
宮	野	川	三	信	名	電	短	期	大	山	川	喜	夫	都	立	修	大	学	教	授		
中	尾	繁	介	電	短	期	大	学	助	山	本	俊	樹	一	橋	大	学	教	授			
小	川	宜	司	短	期	大	学	助	教	山	中	桂	一	成	京	大	学	助	教	授		
小	田		子	慶	東	大	学	教	授	柳	原	伊	織	東	京	大	学	助	教	授		
太				京	大	学	講	師		吉	川	道	夫	中	央	大	学	教	授			

まえがき

本辞典の改訂は、準備期間中およびその後の大小の編集会議で決定された大綱とその具体化の方式によって進められたが、改訂の規模が次第に拡大して難航を重ねた。しかし、3段組の版面の採用などにより最終的には全 2,500 ページ内に本文の収録語数 23 万余と巻末の付録を収容することができた次第である。今回も、大学生以上を対象とし、特に英語英文学の研究者に限らず、広く今日の社会の諸方面で英語に接する人々の要請に応えうることを目標とした。以下、参考までにそのための作業の要点を挙げる。

(1) 見出し語・綴り・発音などの上で、英・米の差がある場合には米式を優先させた。

(2) 旧版の見出し語を総点検して、もはや不必要と考えられるものを削除し、事象万般の進展と複雑化、特に学術などの急激な進歩と分化によって必要となった各分野の語彙を大幅に収録して、形式・内容ともに真に情報時代にふさわしい斬新な英和辞典を作り上げるように努力した。例えば、新たに各専門家を煩わした専門語または固有名詞の増強である。この点では第 5 版は事典的性格を高めている。

(3) 現在の米国および英国の標準的な発音を、紙面の許す限り詳しく記載するように努めた。また、発音表記は、完全な音素表記とすることは差し控えて、本辞典が英語音声学を研究する人たちのための発音辞典としても利用できるように、一部の音素については敢えて異音表記 (allophonic transcription) を採用した。その結果、[ɪ], [ʊ], [t], [ʔ] のような見慣れない記号が使用されている。しかし、実用上は一般の方々にはこれらをそれぞれ [i], [u], [t], [l] と置き換えて読んでいただいて結構である。

(4) 語源の記述に当たっては、各種の英語語源辞典や多数の権威ある英語辞典の語源欄を参照したほか、必要に応じ、それぞれの外国語語源辞典を参看して、もっとも妥当な説をとるように努めた。比較的重要な語については初出年代(概略)を与え、その語の年輪が窺えるようにした。基本的な語については、可能な限り、ゲルマン共通基語、印欧共通基語の推定形を同族語形と共に挙げ、また相互参照によって単語家族の関係をある程度暗示した。単語の語源のみならず、必要に応じ、idiom の由来、いわゆる句源を与えた。

(5) 大部分の見出し語に対する語義および記述の数量は旧版とは比較にならないほど増加しているが、語義の配列と順序は、原則として、旧版に準じて今日の用法から見て頻度数の高いものを先行させるように努め、一般使用者の便を計った。旧版で 'bilingual principles' の一環として訳語の直後に与えていた「双解」は、主にシノニムや英・米の差を示す場合か、訳語が紛らわしい場合に限ることにした。用例は語義解明のためのみならず、文型・統語関係・語法などの点に留意して選んだほか、必要に応じ文法・語法などの注意事項を★印によって示した。

(6) 重要動詞および機能語の記述には全面的書き換えまたは大修正を施し、構文指示・統語関係の指示を強化して、本辞典の語学的性格を高めた。一般重要語の調整においても同様の配慮をした。

(7) 成句を全面的に整理・調整して増強に努めたほか、検索の便を計った。さらに、形式上は成句に類するが事典的な名詞語群をボールド体でその語群の第 1 語の項の末尾に置き、これを「準見出し」と呼ぶことにした。

(8) 巻末の外国語フレーズは、限られたスペースの中で、特に人口に膾炙したものを選ぶようにした。文形式のものを重点的に取り入れ、出典もできるだけ明示し、また随時、意味・用法上の説明を加えた。

(9) 挿絵は総点検の上、書き換えたものあるいは新規に加えたものを含めて、各専門家の校閲を経たものである。

(10) 相互参照は使用者にとって煩わしいと思われるものはなるべく止めて、情報集中化に役立つ参照を徹底させるように努めた。

以上のような操作のために参照した資料には、Oxford 系および Webster 系の大小・新旧の辞典を初めとする内外の各種の英語辞典のほか、発音・語源・文法・語法関係の辞典・参考書類、大事典、年鑑類、および各分野の専門語辞典などがある。編集室の内外から寄せられた用例カードその他多くの資料も適宜利用した。

改訂の規模拡大によるページ数の増加をできるだけ押えるために編集と校正の各段階でスペース削減に努めたが、最終段階においても編集協力者と一部の編集者は編集部と印刷部門の理解と援助を得て、主に版面整備のために語義や記述などの圧縮、用例の短縮・削除などの操作を行なった。振り返ってみると、今回の改訂の仕事量と複雑さは人力依存の限界に達していたと思われる。将来の大改訂には合理化と能率化のためにコンピューターを導入することが必要となりまた可能となるだろう。

終りに臨んで、第5版完成のために御執筆と御助言を賜った各専門分野の146名の方々に對して、衷心から謝意を表したい。また、格別お世話になった次の方々に對して厚くお礼を申し上げる。

Martin Collick, John Kemp, Dennis Hoerner の各先生にはインフォーマントとして校正面で御協力を願った。

在日各大使館からは、その国の地名などについて資料を提供していただいた。

市川繁治郎先生には、多くの資料を提供していただいた。また、坂本龍愛先生は校正の一部を通読して下さった。

発音の校正・準備等に当たっては、福田美子 鍋田良子 平田和人 金井由允 唐木田茂明 柏原公子 柿田啓子 小倉敏博 佐々木直 高橋教雄 田口久美子 田中正之 富岡多恵子 若旅真理子 渡辺雅子の諸氏に、特に中国語発音は金井正氏に、ブラジル・ポルトガル語発音は天野泰明氏にお願いした。

語源の校正は、小倉美知子 関戸美津子 山本文明各氏に、外国語フレーズの検討に当たっては、調査や照合を、小林絢子 田辺春美の両氏にお願いした。

社内では、河野亨雄 紀晃一 岡田稯介 佐々木則子 長井寛三 白崎政男 黒澤孝一 逸見一好 関戸雅男 窪田幸夫の諸氏が編集に当たり、改訂の追い込みが迫るにつれて、長島伸行 小沼利英 篠田達美 改田宏 鈴木康之の諸氏に応援をお願いした。全員は休日も返上して文字通り昼夜の別なく、冷酷な時間の進行と戦いながら仕事の完遂に懸命の努力を続けられた。製版部門で、佐々木修造 大塚二之 和田文五郎 榎本 進 滝瀬正勝 柿岡ノ吉 橋本一郎の諸氏、制作部門で、山崎博二 土方修 佐藤晃輔の諸氏には、当初から無理なお願いを続けたにもかかわらず、終始全面的な御理解と御協力をいただいた。なお、多様化した仕事を処理するため編集室で臨時に編集の手伝いや雑務をお願いした多くのアシスタントの方々にも感謝したい。

以上のように、関係者一同全力を傾けたつもりであるけれども、なお不備な点については使用者一般の方々の御教示と御叱正を賜わることができれば幸いである。

1980年(昭和55年)6月

小 稲 義 男

1. 見出し語

本辞典には、一般の英語語句のほか、固有名詞・常用外来語句・略語・記号・接頭辞・接尾辞・連結形などを収録し、また巻末には外国語フレーズ (Foreign Phrases and Quotations) を収めた。

1.1 すべて立体のボールド体を用い、アルファベット順に配列した。

1.2 綴りの切れ目は中丸 (・) で示した。

ac·a·dem·ic [ækədémik]

a·cad·e·my [əkədəmi] [-mi]

★ただし、実際には行末あるいは行頭において1字を残して切ることはなく、2字を残して切ることも好ましくない。

① 発音の違いによって語の音節の切れ目が異なる場合は、第一の発音に合わせて切った: **sta·tus** [stétəs, stæt- | stét-] n.

外国語の場合は、必ずしも英語音の形によらず、その原語での切り方で示したものがある: **Pi·noc·chio** [pinákiù, pə- | pinákiù, -náu-, -kjəu; It. pinókkjo] n.

② 複合語については、各要素間の切れ目と音節の切れ目が一致する時は、各要素の切れ目にのみ中丸を示し、各要素の分節は省略した (なお3.12 参照)。

1.3 同一綴りでも語源の異なるものは別見出しとし、^{1, 2} などの肩番号で区別した。ただし、語源上は同一語であっても、発音・語形変化その他の説明のために、便宜的に別見出しにしたものがある。

have¹ [ME *have(n)*, *habbe(n)* < OE *habban* < Gmc **habēn* (Du. *hebben* / G *haben*) < IE **kap-* to have in hand, take (L *capere* to hold / Gk *káptein* to swallow): cf. *heave*] — [háev, hév | háev] v. (**had** [háed, héd | háed]; 三人称単数直説法現在 **has** [háez, héz | háez]) — [há(:)v] n.

have² [(h)əv, v; hæv, háev] [↑] — *auxil. v.* (**had** [(h)əd, d; hæd, héd, háed, héd | (h)əd, d; hæd, háed]; 三人称単数直説法現在 **has** [(h)əz, z, s; hæz, héz, háez, héz | (h)əz, z, s; hæz, háez])

pom·pier¹ [pɑmpjə, pɑmpjiér, pɑmpjér | pɑmpjə(r); F. *pompje*] [□ F ~: ↑] *adj.* 型にはまった (conventional), 堅苦しい, 古臭い (old-fashioned).

pom·pi·er² [pɑmpjiér, pɑmpjér | pɑmpjiér, pɑmpjér; F. *pompje*] [□ F ~: ↑] *adj.* 型にはまった (conventional), 堅苦しい, 古臭い (old-fashioned).

1.4 綴りは英米の辞典を参考に、最も一般的と思われる形を採用した。

1.5 米語と英語で習慣的に綴りが異なる時は、米の綴りを優先し、次のように示した。

col·or, 《英》 **col·our** [kálə | -lə(r)]

colour n., v. = color.

re·al·ize [ri:ələiz, riələiz, ri:l- | riələiz] v.

re·al·ise [ri:ələiz, riələiz, ri:l- | riələiz] v. 《英》 = realize.

1.6 異綴りはそれぞれ見出しに立てたが、記述は一方の見出しのもとにまとめた。

① その語順が直前・直後のものであれば, (also...) として示し、見出しの代用とした。

a·field [æfi:ld]

a·fi·ko·man [ä:fikóumən | -káu-] [↑] *Heb. n.* (also **a·fi·ko·men** [~])

AFIPS

Gal·a·had [géaləhæd]

gal·an·gal [géalɪŋgæt, -lən-, -lɪŋ-, -ləŋ- | -lɪŋ-] n. (also

gal·an·gale [géalɪŋgæt, -ləŋ- | -ləŋ-])

gal·an·tine [géalənti:n, -u-] n.

② 語義の説明上異綴りを示す必要のある時は、語順にかかわらず (also ...) を用いて次のように示した。

gage² [géidz] n., vt. = gauge.

gauge [géidz] [↑] (also **gage**) ★ n. 9 の意味では通例 **gage** とつづる; 《米》では n., v. のすべての場合に **gage** もしばしば用いる。

③ 複合語形・派生語形の見出しは原則として、主たる形のものだけをあげて、異綴りの場合の見出しは省略した。

1.7 大文字・小文字の違いだけの場合はそれを明示し、併記見出しとした。

néw thínɡ, N- T- = **néw thínɡ, Néw Thínɡ**

Nèò-Gréek, nèò-G- = **Nèò-Gréek, nèò-Gréek**

1.8 2語以上の見出し語の時、言い換えてできる部分は [] で示したが、[] 内の語の語順が直前・直後に来る場合に限りて用いた。

áctiön phótograph [picture]

= **áctiön phótograph**

áctiön picture

1.9 見出し語の配列順

(1) **air·lift** (2) **mac**
air·lift **Mac**
air lift **MAC**

(3) 数字が含まれた見出し

① 数字だけの見出し語または見出し語の第1語が数字の場合: その数字を発音に従って単語に spell out した場合の順に配列した。

-one suf. **three-cornered adj.** **thirty n.**
1-A n. **3-D adj.** **30-dash n.**
one-a-cat n. **three-day fever n.** **.38 n.**
thirtyfold adj.

② 単語のあとに数字がつく場合:

その単語の順とし、数字部分は1, 2, 3, ... の順で配列した。

carbon n. **U. 《略》 Henry I n.**
carbon 12 n. **U-235 n.** **Henry II n.**
carbon 13 n. **U-238 n.** **Henry III n.**
carbon 14 n. **U-239 n.**
carbóna n. **UA 《略》**

(4) 固有名詞

① 同一綴りの地名・人名では、地名を先にした。

Jack·son¹ [dʒæksən] [← *Andrew Jackson*] n. 1 米国 Mississippi 州中部にある同州の首都; 人口 167,000.
2 米国 Michigan 州南部の都市; 人口 44,000.

Jack·son² [dʒæksən] [《原義》son of Jack] n. 男性名。

② 同一綴りの姓では、その名のアルファベット順に配列した。

Jackson, Andrew n.
Jackson, Barry n.
Jackson, Helen (Maria) Hunt n.
Jackson, John Hugh·lings [hjú:lɪŋz] n.
Jackson, Thomas Jonathan n.

③ 人名で、その人本来の名前でない肩書きなどは、ローマ字体で示したが、その部分は語順には数えなかった。

Chur·chill [tʃ:sʃɪl, tʃ:sʃɪt | tʃ:sʃɪt], **John n.**
Churchill, Lord Randolph (Henry Spencer) n.
Churchill, Winston n.
Churchill, Sir Winston (Leonard Spencer) n.

1.10 意味の自明な派生語は、見出しの記述の最後に追い込んだ。

2. 準見出し

事典的な説明が必要な次のような名詞語群は、見出しに準ずるものとしてボールド体で、原則としてその第1語の見出しの個所で扱った。主として「名詞+前置詞(または接続詞)+名詞」の形式をもつ語群である。

lily n.

lily of the valley [《なぞり》← L *lilium convallium* ...] 《植物》ユリ科スズラン属 (*Convallaria*) の植物の総称; (特に) ドイツスズラン (*C. majalis*), スズラン (*C. keiskei*) (など)。

article n.

articles of association [the —] 《法律》(1) 《英》(会社)の通常定款(基本定款 (memorandum of association) に記載されない会社の組織, ...), (2) 《米》(法人でない社団 (unincorporated association) の) 定款。

federal adj.**Federal Bureau of Investigation** [the —] (米国の)

連邦捜査局(司法省の一局; 略 FBI).

★ 例外的に次のような語群も準見出しで扱った.

drop v.**drop the handkerchief** 【遊戯】ハンカチ落とし【...】.**north n.****north by east** 北微東(略 NbE).**north by west** 北微西(略 NbW).**3. 発音**

3.1 国際音声記号(International Phonetic Alphabet; 略 IPA)を用い, [] に入れて示した.

3.2 第1アクセントは [ˈ] で, 第2アクセントは [ˈ] で示した.

3.3 米音と英音とが相違する場合に, 米音を先に示し, 短い縦線を引いて次に英音を示した.

hot [hát | hót]

3.4 外国音は英語音の後に ; を用いて示した.

Ar-thur [áθə | á:θə(r); G. ártur, F. arty:r]

3.5 十分に英語化していない外国語の場合は原語の発音だけを示したものがある.

Côte d'I-voire [F. kotdivwa:r]

3.6 弱形と強形(⇒ 発音解説 7.2 (3)) の別は ; を用いて示した.

from [frám; fràm, frám, frám, frám] frám; fràm, fróm]

3.7 併記された発音記号中の一部が先に示された発音記号と共通する場合は, 原則として音節単位でハイフン [-] を用いてその共通部分を省略した.

fig-u-ra-tive [figurətiv, -gər- | -triv]

=[figurətiv, figurətiv | figjurətiv, figjurətiv]

3.8 見出し語の発音と全く共通の部分は ~ を用いて示した.

a-mi [æmí; a:mí; F. ami] n. (pl. ~s [~z; F. ~]) =

[æmíz; a:míz; F. ami]

haus-frau [háusfráu; G. háusfrau] n. (pl. ~s, ~en

[~ən; G. ~ən]) = [háusfrauən; G. háusfrauən]

3.9 単にアクセントだけが移動する場合, 各音節をダッシュ [-] で表わし, アクセントの位置の違いを示した.

cap-size [káepsaiz, -r- | -r-]

=[káepsaiz, kæpsaiz | kæpsaiz]

over-lap [-r- | -r-] v. — [-r- | -r-] n.

=[ðuvələp | ðuvələp] v. — [ðuvələp | ðuvələp] n.

3.10 省略可能な音は () を用いて示した.

pro-tu-ber-ance [pro(v)t(j)ú:b(ə)rəns | prətjú:-]

=[proutjú:bərəns, prútjú:bərəns, proutú:bərəns, prou-

tjú:bərəns, prútú:bərəns, prútjú:bərəns, proutú:bərəns,

prútú:bərəns | prátjú:bərəns, prátjú:bərəns]

3.11 品詞や語義によって発音が異なる場合は, 該当個所にそれぞれ発音を表示した.

im-port — [impóæt, əm-, -póæt, ímpoæt, -poæt | impót; -r-] v.

— [ímpoæt, -poæt | -pót; n.

— [ímpoæt, -poæt | -pót; attrib. adj.

gey-ser — n. 1 [gáizə | gáizə(r, gí:-] 間欠泉, 間欠

温泉, 間欠噴泉. 2 [gí:-] (英) (風呂・台所などに取り付

けた)瞬間湯沸かし器. — v. [gái- | gái-, gí:-]

3.12 見出し語が2語(以上)の複合語などでは, その各々の要素の発音が他で示されている場合, アクセントだけを示した.

cánnon-ball**weáther máp**

一方の語(あるいは一部の要素)が初出の場合は, その部分だけの発音と分節を示した.

cán-nel cóal [kán-]

3.13 単独の語であっても, ある語の派生語形で, その語幹となる語の発音と造語要素との結びつきが英語の通則で推測がつきやすいものは, アクセントだけを示した.

com-mand [kəmánd | -má:nd]**com-mánd-er** n. = [kəmándə | kəmá:ndə(r)]**com-mánd-ing** adj. = [kəmándɪŋ | kəmá:ndɪŋ]

ただし, 発音が変わる時は, 変わる部分の発音を表示した.

con-dí-tion [kəndíʃən] n.**con-dí-tion-al** [-ʃən, -ʃnəl] adj.

=[kəndíʃən, kəndíʃnəl]

con-dí-tion-al-ly [-ʃ(ə)nəli | -li] adv.

=[kəndíʃ(ə)nəli | kəndíʃ(ə)nəli]

lib-er-ate [libərət] v.**lib-er-à-tor** [-tə | -tər] n.

=[libərətə | libərətə(r)]

set-tle [sétt | -tɪ] v.**sét-tler** [-tlə, -tɪə | -tlə(r, -tɪə(r)] n.

=[sétlə, séttə | sétlə(r, séttə(r)]

4. 語源

4.1 発音表記(ない場合は見出し語)の直後に, [] の形式で示した. また, 成句や各語義などについても必要な限り [] を用いて, 句源や語義変化を明らかにした.

4.2 二つ以上の品詞に跨る時は, 主要な品詞に限って語源をあげた. 特に一方の品詞からの転用によるものは略記したものが多い.

4.3 英語内で造語された語で, その構成要素の自明なものは語源記述を省略した.

4.4 固有名詞のうち, 英・米の地名および男性名・女性名には語源を与えた.

4.5 OE (700-1100) に遡る語は直ちに OE の語形をあげ, 初出年代を省いたが, ME (1100-1500) に遡る語については, 英語における初出文献の執筆(成立)年代を, O.E.D. (Oxford English Dictionary), M.E.D. (Middle English Dictionary) により [] に入れて示した. ただし, 派生語についてはしばしば簡略に [ME] とのみ記した. また 1400-1500 年間に初出の語については [15C] のように世紀で示した. 16 世紀以後の語についても, 時に世紀で示したものがある. 20 世紀の造語は通例年代指示を省いた.

boat [OE bāt small open vessel < Gmc *bait- (原義)?

dugout canoe or split planking (ON beít) ← ? IE

*bheid- to split: ⇒ bite]

beef [(c1300) bēf, boef < ONF boef, buef (F bœuf)

< L bovem, bōs ox < IE *gʷōus: ⇒ cow¹]

smog [(1905) (混成) ← SM(OKE) + (F) OG¹]**doubly** [ME]**borrowed** [(15C)]

★ (c1300) などの c は circa (=about), (a1325) などの a は ante (=before) を指す.

4.6 言語名は多くの場合略形で示した(表見返しの略語一覧表参照).

4.7 語形はローマ字以外のものは転写してイタリック体で示し, その意味はローマ字で示した. 転写法については, 一般に標準的なものによったが, 一部は本文の alphabet 表を参照された.

4.8 2語(以上)の見出し語で, その一部の要素についての語源を示す場合, それを明記した.

zip code [zip: (頭字語) ← z(oning) i(mprovement)

p(lan) [p(rogram)]]

4.9 人名に由来する語源の場合, その人名が本文の見出しにある時には, その説明を省いた.

4.10 語源欄で用いた記号等については以下の通り.

< 発達 (developed from) 音法則的発達を示す.

□ 借入 (borrowed from)

← 派生 (taken from) 広く造語関係を示し, また語形をあげず単に借入言語名のみをあげる場合にも, 「...語起源」の意味で用いた.

← ? 語源不詳

+ 結合 (and) 複合語・合成語などの構成要素を示す.

∞ 交替 (replaced by)

* 推定形 (unattested) 文証されないが理論上推定された語形であることを示す.

/ 同族語を例示する場合, 言語間の区切りとした.

// 異説を列挙する場合, その区切りとした.

(i) (ii) 語源表記が混み入る時, 異説列挙の区分に用いた.

↑, ↓ その語の直前・直後の語源欄または見出し語を参照の意に用いた.

~ 見出し語と全く同一語形の時, 誤解のない範囲で用いた.

? 疑問の余地のあることを示す.

‘ ’ 意味表示を示す.

意味表示とその語を参照の意を兼ねる時は ‘ ’ の中で SMALL CAPITAL を用いて示した: **jongleur** [(1779) □ F ~ 'JUG-GLER, (古) minstrel']

4.11 語源欄で用いた主な用語については以下の通り.

〔異化〕 dissimilation 例 colonel

〔異分析〕 metanalysis apron

〔英語化〕 Anglicization electrophore

〔押韻俗語〕 rhyming slang berk

〔音位転換〕	metathesis	bird
〔加重〕	reduplication	zigzag
〔逆成〕	back-formation	baby-sit
〔逆つづり〕	anagram	Erewhon
〔擬音語〕	onomatopoeia	cuckoo
〔混成〕	blending	smog
〔短縮〕	contraction	jerry ²
〔通俗語源〕	folk etymology	sand-blind
〔綴り変え〕	anagram	lutidine
〔転配〕	corruption	jitter
〔転用〕	conversion	box ³
〔頭音消失〕	aphaeresis	cute
〔頭字語〕	acronym	laser
〔なぞり〕	calque	folk dance
〔鼻音化〕	nasalization	bangtail
〔尾音消失〕	apocope	mitt
〔部分訳〕	partial translation	borough-English
〔変形〕	modification	Jan
〔ラテン語化〕	Latinization	encarpus
〔略〕	abbreviation	exam

5. 品 詞

5.1 用いた品詞表示は以下の通り。

n., pron., rel. pron., demons. pron.; v., vt., vi., auxil. v., substitute v.; adj., attrib. adj., pred. adj., demons. adj.; definite article, indefinite article; adv., rel. adv.; conj.; prep.; int.; pref., suf.

5.2 同一語で異なる品詞は — をもって区切りとした。

5.3 〔略〕 abbreviation, 〔記号〕 symbol は品詞表示の代用とした。

5.4 連結形と一部の外来語句の見出しには品詞名は示さなかった。

5.5 特に外来語意識が残っていると思われる外国語については、品詞名の前に *F., G., It.* などの言語名を示した。

6. 語形変化

名詞・動詞・形容詞・副詞の不規則変化形はすべて示した。

6.1 名詞の複数形

① 見出し語に直接 *-s* か *-es* がつくもの、および *-y* が *-i* に変わって *-es* がつくものは、示さなかった。

ad-e-no-ma [ædənóuma, ædɒ- | ædɪnóuma, ædə-] *n.*

(*pl. ~s, ~-ta* [~tə | ~tə])

★ 不規則変化形と両方ある場合、規則変化も表示した。

② *-o* で終わる語は *-s* か *-es*, またはその両形があるので、これを明記した。

ca-ca-o *n.* (*pl. ~s*)

kan-ga-roo *n.* (*pl. ~s, ~*)

mot-to *n.* (*pl. ~es, ~s*)

③ 複合語形の場合、複数形は示さなかった。ただし、語の第1要素が変化する場合は示した。

mother-in-law *n.* (*pl. mothers-*)

attorney general *n.* (*pl. attorneys g-, ~s*)

6.2 動詞の過去形・過去分詞・-ing 形

① 見出し語に直接 *-ed, -ing* がつくもの、および *-e* が落ちて *-ed, -ing* のつくもの、*-y* が *-i* に変わって *-ed* がつくものは示さなかった。

② 語尾の子音字が重なるものは示した。

nod *v.* (**nod-ded**; **nod-ding**)

yap *v.* (**yapped**; **yap-ping**)

③ 複合語形では、変化する部分だけを表示した。

nóse-dive *n.* (**-dived**, (米) **-dove**; **-dived**)

6.3 形容詞・副詞で、*-er, -est* の比較級・最上級がある場合、それを示した。*-er, -est* の型と *more ~, most ~* の型が両方ある場合、頻度に従って表示した。

clev-er *adj.* (**~er**; **~est**)

chaste *adj.* (**chast-er, -est**; **more ~, most ~**)

com-mon *adj.* (**more ~, most ~**; **~er, ~est**)

6.4 代名詞の複数形・目的格・所有格を示した。

6.5 不規則変化形の綴りの語順が、もとの語の直前・直後にくる場合は、別見出しは立てなかった。語順が離れる場合は、検索の便のため別見出しを立てたが、そこでは発音・分節とも省略した。

7. 語義・用例

7.1 語義の配列順は、原則として、現代の用法として最も一般的なもののから順次特殊な語義に及ぶようにした。

7.2 品詞別に 1 2 3 で語義を大別し、必要に応じて a b c と細別した。また、特に必要な場合には A B C を用いて、より大きな範疇を示した。

7.3 [] を用いて、必要な構文指示などを示した。

God *n.* 1 [しばしば *g-*] (各種の信仰に基づく) 神, ...

2 [*g-*] 神像, ... 5 [the gods] (劇場の) 天井桟敷(せき); ...

king *vt.* 2 [通例 ~ it として] 君臨する; ...

amuse *vt.* 1 a ...; [~ oneself で] 楽しく過ごす, 遊ぶ

7.4 [] を用いて、用法指示を示した (11 用法指示一覧参照)。

7.5 [] を用いて、ある特定の分野で使われることを示した。

〔医学〕〔英史〕〔音楽〕〔数学〕〔哲学〕〔法律〕〔服飾〕〔紋章〕など。

7.6 訳語部分に = として語句をあげたものは後者と同義であることを示す。

7.7 用例において見出し語に該当する部分は ~ で示した。

7.8 見出し語に関連する前置詞・副詞など、および語法上注意すべき部分はイタリックで示した。

7.9 用例中 one は主として「自分」、a person は「相手」「他人」の意に用いた (詳しくは 8.5 参照)。

7.10 用例中などで、その引用の出典は次のように示した。

① 原文の句などをそのまま引用する場合: *Frailty, thy name is woman.* もろきものよ、汝の名は女なり (Shak., *Hamlet* 1.2.146).

② 原文の形そのままでない場合, cf. をつけた: a *pearl of great price* 非常に高価なもの (cf. *Matt.* 13:46).

7.11 < > の用法

① 語義を限定する次のような語を示した。

動詞の主語・目的語、形容詞の名詞連結、前置詞の目的語など。

arbitrate *vt.* 1 <争議などを> 仲裁[調停]する: ...

crab³ *vt.* <鷹(たか)が> 他(ひと)の鷹を> つめてひっかく, つかむ (scratch); <つかみ合う (fight). — *vi.* <鷹が> つめてひっかき合う

effervesce *vi.* 1 <炭酸水などが> 沸騰する, (盛んに) 泡立つ (bubble up). 2 <ガスが> 泡となって出る. 3 <人が> 熱狂する, 興奮する, 活気づく: ...

blank *adj.* 4 <生活など> 空虚な, からっぽの; ...: a ~ existence [day] ... 5 a <顔など> ぼんやりした, ぼかんとした (vacant); 生気[表情]のない; ...: a ~ face 無表情な顔 / ...

stiff *adj.* 5 a <風・流れなど> 強い, 激しい: ... b <酒など> アルコール分の多い, 強い, ... 6 a <半固体など> 比較的堅い, ... b <土など> 密質で堅い: ...

around *prep.* 8 (米) <角> を曲がった所に (〔英〕round): a store ~ the corner ...

② 慣用的に用いられる副詞・接続詞・不定詞などを訳語の後で示し、訳語中でもそれに対応する部分を示した。

throw *vt.* 6 a <衣服などを> 急いで着る, 引っかぶる <on>, かなぐり捨てて <off>: ~ off [on] one's coat 上着をさっと脱[着]る / ...

game *adj.* 3 (口語) ...; <...する> 気[元気]がある <to do>: He is ~ to do anything. 元気で何でもする / ...

③ 訳語中で、〔構文指示〕に対応する部分を示した。

decide *vt.* 1 b [to do を伴って] <...しよう> 決心する, <...すること> にする: She ~d to stay at home. 彼女は家にいることにした. c [that-clause を伴って] <...と> 判定[推定]する, 考える: I ~d that there would be nothing for it but to obey him. ...

7.12 [] の用法

慣用的に用いられる前置詞または *as* を示し、訳語中でも、それに対応する部分を示した。

consist *vi.* 1 [部分・要素から] 成る (of): Water ~s of hydrogen and oxygen. ... / The household ~ed of four women. ... 2 [...に] 存する, ある (lie) (in): Happiness ~s in contentment. ... 3 [...と] 両立する, 一致する (harmonize) (with): Health does not ~ with intemperance. ... / The story does not ~ with the evidence. ...

dredge² *vt.* [食物に] <小麦粉・砂糖などを> 振りかける (sprinkle) (over), ...に [粉を] まぶす (with): ~ flour over meat = ~ meat with flour.

gift *vt.* 1 a <人に> [物を] 贈る (present) (with): ~ a person with a thing. 2 [主に p.p. 形で] (性質などを) ...に 賦与する (endow) (with): He is ~ed with great talents. ...

regard *vt.* 3 [...であると] 考える, [...と] みなす (look upon) (as): I ~ him as a friend. ...

fond¹ *adj.* 1 [Predicative に用いて] [...を] 好んで, [...

が好きで [of]: be ~ of children [music, drink] ... /
get [grow] ~ of...

- 7.13 くゝに示された語句とくゝに示された語句が同一センテンスに現われ得る(共起する)場合はくゝとくゝとを併記し、そうでない(共起しない)場合は短い斜線 (/)を用いて区別した。

共起する場合:

blossom vi. 2 栄える, 発展する; 発達して(...と)なる
<out> (<into>): His genius ~ed early. ... / The village
~ed (out) into a town. ... / He will ~ out as [into] a
statesman. ...

共起しない場合:

shut vt. 3 a <人>騒音などを閉じ込める (confine) <in,
up> (<into>): ~ a noise in ... / ~ oneself in ... / ~ a
bird into a cage ... / He has been ~ in by illness. ... /
~ a criminal up in a prison ...

fame vt. 2 [通例 Passive で] 《古》(...と)世間で言う
(as, for) / <to be [do]>: He is ~d as [to be] cruel.

slice vt. 2 薄く切り取る <away, off> / <from>: ~ off
a piece of meat.

- 7.14 同一の語で前置詞にも副詞にも機能する場合は、どちらか主要な用法のくゝで(もう一方を)代表させ、可能な限り用例で両様の用法を示した。

deal² vt. 3 《俗》<人>(仕事・トランプなどに)仲間入りさせる, 仲間に加える (<in>): Father *dealt* me in the
business. ... / He asked me to ~ him in.

8. 成 句

構成要素の交替をほとんど許さない語群で、一つの意味単位をなし、しかもその意味が構成要素の総和からは予測困難なものは、通例成句として扱い、品詞ごとにまとめて斜体のボールド体で示した。

- 8.1 すべてボールド体のアルファベット順に配列したが、固定していない不定冠詞の a, an は語順に数えていない。

- 8.2 成句を出す箇所は、原則として以下のようにした。

- ① 名詞が含まれた成句は、名詞の箇所では扱った。
- ② 動詞+副詞または前置詞の成句は、動詞で扱った。
- ③ 形容詞・副詞・前置詞の結び付きの成句は、最初の語のもので扱った。

- 8.3 同一の成句に二つ以上の名詞または動詞が含まれているものは、原則として、最初の名詞または動詞の見出し語のもので扱った。

- 8.4 動詞の成句では、説明の必要上、その動詞の機能により (vi.) (vt.) に分けて表記したものがある。

- 8.5 成句中 one, one's は主として「自分」に、a person, a person's は「相手」「他人」の意に用いた。

mind n. *give a person a bit [piece] of one's mind*
<人>に直言する; <人>をしかる[とがめる]: I gave him
a piece of my ~ on the matter. その事について彼に
率直な意見を述べた。

know one's own mind はっきりした自分の意見をもっている, 考えがぐらつかない: He doesn't know
his own ~. 彼には定見がない。

one, a person とともに可能な場合は a person で代表させた。

nose n. *under a person's (very) nose* 《口語》人のすぐ目の前[面前]で, 鼻先に[で]: She found her spectacles *under her very* ~. 彼女は(捜していた)眼鏡をすぐ目の前に見つけた / The man snatched the article right from *under our* ~s. その男は私たちの見ている目の前でその品をこっそり盗った。

9. 挿 絵

語の理解を助けるために必要な挿絵・図解・表を採用した。

- 9.1 可能な限り情報の集中化をはかり (heraldry, horse, Rugby Union など), 必要に応じて他の項目からその挿絵の出ている項目を⇒で指示した。

- 9.2 動物・植物などの挿絵で、その語の説明との関係で特に必要な場合は、その絵が示す動物・植物の学名を挿絵の名前に付した: auk, blackberry, ibex など。

10. 諸記号の用法

- : 訳語の後に用いて、用例の始まりを示す。
- ~ 見出し語の綴りまたは発音と共通の部分を示す。
- / 用例と用例の区切りを示す。
- cf. 参照すべき語句を示す。
- ⇒ その先の語句に詳しい説明があることを示す。
- () ① かっこ内の語(句)は省略可能を示す。
② 訳語の後で双解を示す。
- (↔) 訳語の後で対照語(句)を示す。
- [] ① かっこ内の語(句)と直前の語(句)との言い換えを示す。
② 訳語の前で構文指示や語法指示を示す。
- < > ① 訳語中で、その語義の限定に必要なものを示す。
② 訳語の後で、統語関係にある副詞・接統詞などを示す。
③ 訳語中で、②に、あるいは[構文指示]に対応する部分を示す。
(詳しくは 7.11 参照)
- [] ① 訳語の後で、統語関係にある前置詞などを示す。
② 訳語中で、①の前置詞に対応する部分を示す。
(詳しくは 7.12 参照)
- / < > とくゝが共起しないことを示す (詳しくは 7.13 参照)。
- ★ 語法・用法上の注意事項を示す。
- SMALL CAPITAL 参照する語句が数語からなる時、その語句がおさめられている見出し語を示す:
cf. signs of the ZODIAC, ⇒ at a TIME
綴り字本来のハイフン: phone-in
行末のハイフン:
talk·y [tʌ:kɪ | -kɪ] adj. (talk·i·er; -i·est) 1 = talkative. 2 <劇・小説など>語り[会話]の多すぎる: ...

11. 主な用法指示一覧

《米》 Americanism	《ロンドン方言》 cockney
《英》 Britishism	《輕蔑》 contemptuous, etc.
《スコット》 Scottish	《学生語》 school term
《アイル》 Irish	《小児語》 nursery term
《ウェールズ》 Welsh	《古》 archaic
《豪》 Australian (& New Zealand)	《戲言》 humorous or facetious
《ニュージーランド》 New Zealand	《反語》 ironical
《カナダ》 Canadianism	《皮肉》 sarcastic
《インド》 Anglo-Indian or Indian	《文語》 literary
《北英》 Northern England	《詩》 poetical
《口語》 colloquial	《比喩》 figurative
《俗》 slang	《婉曲》 euphemistic
《卑》 vulgar or taboo	《まれ》 rare
《方言》 dialectal	《廃》 obsolete or obsolescent
《俗用》 improperly used, not in technical use, etc.	

★ いずれも特に限定するものではなく、その傾向を示すもので《英》ならば英国用法ないし、主として英国用法を意味する。

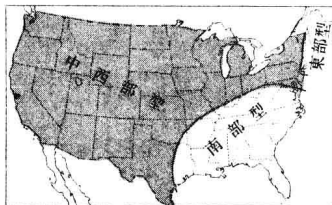
発音解説

1. 米音と英音

1.1 本辞典では現在つまり 20 世紀後半におけるアメリカ英語およびイギリス英語の標準的な発音を示している。多くの語においては発音が必ずしも固定しておらず、語によっては数種の発音を記している。

1.2 今日のイギリス英語の標準的な発音とみなされているものはロンドンを中心とする南部イングランドの教育ある人たちによって話されているタイプの発音で、しばしば「容認発音」(Received Pronunciation; 略 RP) と呼ばれるものである。Received とは「上流社会で受け入れられている」という意味で、元来は中上流階級子弟の大学予備校としての性格をもっていた public school で教育を受けた南部 England 出身者の発音であったが、今日ではその範囲が広がり、教育・文化・放送関係の人々の多くによって使用されている。イギリスの人口に比して使用人口は必ずしも多くはないが、政治的・文化的に高い優越性をもっている。本辞典ではこれを英音と呼ぶ。

1.3 アメリカ英語では、イギリス英語におけるような意味での標準発音は存在しない。アメリカでは、それぞれの地方における教養ある人たちの発音が、それぞれの地方の標準とされている。おもな方言区分は図の通りである(それぞれは更に下位区分されるのであるが、かなり専門的になるのでここでは省略する)。これらの方言の相違はすでに初期の植民地時代に遡るもので、植民地時代の東部大西洋沿岸の英語は、移民の定住地域によって、北部方言、中部方言、南部方言に 3 大別された。この方言区分は、英本国から渡来した移民の出身地と大きな関係がある。北部方言は Massachusetts 湾周辺を中心として発達した北部植民地の方言であるが、その移民の 3 分の 2 は南部 England の出身であった。また南部方言は Virginia 州の沿岸地帯から発達した植民地の方言だが、ここでも初期の移民の半数以上は南部 England 出身であった。植民地初期の北部方言は New England 地方を中心とする今日の東部方言へと、南部方言は、Virginia 州から南西部一帯、Texas 州東部にいたる地域で話される今日の南部方言へとそれぞれ発達したわけであるが、この両方言が母音の後の r を発音しない点で南部 England 英語と共通点をもっているのは、このような歴史的背景があるからである。また、この二つの地域が独立後も英本国と船舶による往来が頻繁であったことも、イギリス英語と類似している理由としてあげられよう。



東部方言は更に、例えば hot, top の母音に一般のアメリカ発音の [ɑ] でなく、英音と同じ [ɒ] が現われ、また ask などの語に [æ] でなく [ɑ] を用いる点でもいっそう英音に接近している。一方植民地時代の中部方言は New York から Pennsylvania 州東部に及ぶものであるが、上の二つの方言の地域と違って、この地域では England 北部や Scotland, Ireland からの移民が多かった。これらの地方の英語はもともと南部 England の英語よりも保守的であったので、これを受け継いだ中部方言は、北部方言や南部方言よりも初めから古い英語の姿を多く留めていたわけである。後になって開拓民が西へ西へと向かうにつれてこれら 3 種の方言が混じり合っ、西へ行くほど各方言の境界はばやばやと、図で見るように広大な地域にわたって今日の非常に均質的な中西部方言が形成されたのである。西部への移民は中部植民地を中心とする進取の気性に富む英本国北部からの移民が圧倒的に多かったため、中西部方言は、植民地時代の中部方言の流れを汲むもの、つまり英本国北部の英語につながる保守的な性格を帯びることになった。この中西部方言は地域にして米本土の 4 分の 3、人口にして 3 分の 2 を占めるもっとも勢力の大きな方言で、しばしば「一般米語」(General American; 略 GA) と呼ばれる。本辞典ではアメリカ英語の発音としては主としてこの型の発音を示し、これを米音と呼ぶ。しかし、アメリカ人は郷土意識が強く、東部方言や南部方言の話し手たちも自分たちの話す英語に誇りをもっている。特に東部方言は文化的にも

優越性を保ち、放送界においても有力な地位を占めていて、東部の人たちは General American という名称に強い反発を示すことが多い。

2. 音素

ある言語において意味を区別するはたらきをもつ最小の音声上の単位を音素 (phoneme) という。英語では、4.5 で述べるように、「明るい i」[i] が母音の前で、「暗い i」[ɪ] がその他の位置で現われる。しかし、[i] と [ɪ] とでは意味を区別するはたらきがないので、両者はともに音素 /i/ に属する。現在の言語学では個々の音は [] で囲み、音素は / / で囲んで示すのが慣行となっている。

本辞典では大体において、一つの音素は一つの記号で表わすという音素表記 (phonemic transcription) を原則としているが、上の /i/ や米音の /t/ など日本人の耳にはかなり違った響きをもつ音の場合には、音素の中の異音 (allophone) を示す異音表記 (allophonic transcription) を採用しているので、発音は / / で囲まずに [] で示した。

3. 英語の母音

現代英語の特徴の一つとして、強母音 (strong vowel) と弱母音 (weak vowel) の別が存在することが挙げられる。前者は多少とも強い強勢の存在する音節に現われ、後者は完全な弱音節に現われる。

強母音は、更にそれが現われる音節の構造によって、抑止母音 (checked vowel) と開放母音 (free vowel) とに分けられる。抑止母音は閉音節にしか現われず、一方、開放母音は閉音節にも開音節にも現われる。弱母音は、閉音節にも開音節にも現われる。

抑止母音は、一般に短母音 (short vowel) と呼ばれるものである。開放母音は、一般に長母音 (long vowel) と呼ばれるものと、二重母音 (diphthong) および三重母音 (triphthong) とを含む。以下では便宜上、短母音、長母音、二重母音、三重母音の順に簡単に解説するが、これらの区別は現代英語においては絶対的なものではない。

英語の母音は一般に、無声子音の前では短く、有声子音の前および語末では長くなる傾向がある。従って bid [bɪd] の短母音 [ɪ] の長さとは beat [bi:t] の長母音 [i:] の長さは実際はほとんど同じくらいである。

3.1 短母音

1 [ɪ] 日本語の「イ」と「エ」の中間の感じで、唇や舌の筋肉は緩んでいる: lip [lɪp], big [bɪg], gym [dʒɪm], symbol [sɪmbəl].

2 [e] 英音では「エ」に近いが、米音ではもう少し舌の位置が低く、ときとして後寄りになるのを正確には [ɛ] で表わすべきものであるが、本辞典では、従来通り [e] を米音・英音両方に共通して用いている: end [énd], less [lés]; head [héð], bread [bréd].

3 [æ, æ:] や「エ」の響きを伴った「ア」で、咽頭が緊張する感じを伴う。この母音は、単音節語で特に有声子音および無声摩擦音の前で長くなることが多く、このようなとき本辞典では [æ:] で表わす: cap [kæp], sack [sæk], lamp [læmp], bag [bæc]g, lass [læc]s.

4 [æ, æ:] | a: 直後に [f, θ, s] または [m, n] + 子音が続くとき、米音では上と同じ [æ, æ:] であるが、英音では 3.2.2 の [a:] となることがある: staff [stæc:]f | stáf:, plant [plænt] | plá:nt.

5 [ɑ, ɑ:] | ɑ 米音では口の奥の方で発音される「ア」で、上の [æ:] と同じ条件で長めに発音されることがある。米国人の中には、この母音を常に 3.2.2 の [ɑ:] と同じように長めに発音する人もある。この人たちの発音では、bomb と balm とは、ともに [bá:m] となる。一方英音では、僅かに唇のまるめが加わった音である: top [táp]tɒp, rod [rác]d | ród; what [(h)wát] | (h)wót, quality [kwáləti | kwóləti, -lɪ]. (3.2.3 の [ɔ:] の音色と区別して [ɑ] の記号を用いることもある.)

6 [ɔ, ɔ:] | ɔ, θ, s, ŋ および [r] + 母音の前では、英音は上と同じ [ɔ]。米音では、一般に 3.2.3 の [ɔ:] だが、英音の [ɔ] が現われることもある。従って精密には [ɔ:, ɒ:, ɒ] と表わすべきであるが、このようなとき本辞典では [ɔ:] | ɔ:] で示す: off [ɔc]f | ɔf, cloth [klɔc]θ | klɔθ, foreign [fɔc]rən, -rɪn | fɔr-].

7 [ʊ] 東日本の標準日本語の「ウ」よりも唇のまるめがやや強いが、舌の位置は低い。唇や舌の筋肉は緩んでいる: cook [kúk], foot [fút]; bush [búʃ], pull [pú].

8 [ʌ] 英音では「ア」に近いが、米音ではそれよりも高く、やや奥寄りである: fun [fán], luck [lák], come [kám], dove [dáv].

3.2 長母音

- 1 [i:] 日本語の「イー」に近く、[i] よりも舌の位置が高く緊張している: bee [bi:], tree [tri:], east [i:st], field [fi:ld].
- 2 [a:] 3.1.5 の [a] よりやや長い母音。この母音は、英音では一般的だが、米音ではあまり普通ではない: father [fá:ðə | -ðə(r)], spa [spá:] | calm [ká:m].
- 3 [ɔ:] 米音では日本語の「オー」よりも口が開き舌が低く、[ɒ:] で表わしてもよいことがある。逆に英音では舌は高めで [o:] に近づくこともあるが、本辞典では米音・英音共通に [ɔ:] で表わす: author [ɔ:θə | -θə(r)], taught [tɔ:t], law [lɔ:], talk [tɔ:k].
- 4 [u:] [u] よりも更に唇がまるまり、舌の位置も高く緊張している。綴り字は oo であるが u, o で表わされることもある: cool [kú:t], moon [mú:n], June [dʒú:n], prove [prú:v]. この母音が [j] に続くときには、精密には [iu:] で表わされ、現代英語の音韻体系から言うとき独立した二重母音の一種とみなすこともできる: cute [kjú:t], music [mjú:zɪk]; Euclid [jú:klɪd]; few [fjú:]. この場合米音では [t, d, n] の後は [j] が落ちることもある: tune [t(j)ú:n | tjú:n]; dew [d(j)ú:] | djú:; neutral [n(j)ú:trəl | njú:].
- 5 [ə:] | ə: 英音では「アー」と「ウー」の中間のような感じの不明瞭な母音であるが、米音では舌先が歯茎の後部へ向かって持ち上がって少し奥の方へそり返るか、または舌の中央部を少し持ち上げて後にずらして、[ɪ] のような独特の響き加わる。対応する綴り字が、母音字 + r であるのが特徴である: term [tɜ:m | tɜ:m]; third [θɜ:d | θɜ:d]; burst [bɜ:st | bɜ:st]; earth [ɜ:θ | ɜ:θ]; work [wɜ:k | wɜ:k].
- 6 [ɔ:(r) | ɔ:] urr, our, w の後の orr の後に更に弱母音が続くときには、米音では上の [ə:] であるが、英音では 3.1.8 の [ʌ] となる。この場合、米音では理論的には [r] の記号は不必要で、[hɜ:i], [kɜ:ɪdʒ], [wɜ:i] と表わせばよいのであるが、とまどう読者もあると考えられるので次のように [r] を入れて示した: hurry [hɜ:(r) | hɜ:rɪ]; courage [kɜ:(r)ɪdʒ | kɜ:r-]; worry [wɜ:(r) | wɜ:rɪ].

3.3 二重母音

- 1 [eɪ] 3.1.2 の [e] よりやや高い位置から [ɪ] の方向へ移行する: cake [kéik], made [méid]; plain [pléin]; day [déi]; veil [véit]; they [ðéi].
- 2 [aɪ] 「ア」あたりから [ɪ] の方へ移動するが [ɪ] までは到達せず、厳密には [ae] 程度で、また出発点は [a] から [ɑ] まで個人差がある: ice [á:rs], pride [práid]; pie [pá:ɪ]; fly [fláɪ].
- 3 [ɔɪ] 「オ」よりやや低い位置から [ɪ] の方へ移動するが、[ɪ] までは到達せず [œ] 程度: hoist [hóist], noise [nóiz]; boy [bóɪ], toy [tóɪ].
- 4 [aʊ] 「ア」あたりから [ʊ] の方へ移動するが、[ʊ] までは到達せず、[ao] 程度で、出発点は [a] から [ɑ] まで個人差がある: out [áut], house [háus]; cow [káu], town [táun].
- 5 [ou | əu] 米音では「オ」よりやや高い位置から [ʊ] の方へ移行する。一方英音では一般に唇のまるめがなく舌の位置も前寄りとなって 3.2.5 の [ə:] のあたりから [ʊ] へ向かう傾向が強い: go [góu | gáu], code [kóud | káud]; boat [bóut | báut], road [róud | ráud]; snow [snóu | snáʊ].
- 6 [ɪə | iə] [ɪ] の位置から米音では [ə], 英音では [ə] へと移行する: here [híə | híə(r)]; deer [díə | díə(r)]; clear [klíə | klíə(r)].
- 7 [eə | ea] 米音では 3.1.2 の [e] (つまり [ɛ]) から [ə] へ、英音では [e] より低い位置から [ə] へと移行する。出発点が更に低くなって [æə] となることも多い: care [kéə | kéə(r)]; pair [péə | péə(r)]; bear [béə | béə(r)].
- 8 [ʊə | uə] [ʊ] の位置から [ə] または [ə] へ向かう: poor [púə | púə(r)]; tour [túə | túə(r)]; assure [əfúə | əfúə(r)]. この二重母音が [j] に続くときは、精密には [iuə | iuə] と表わされる一種の三重母音となる: cure [kjúə | kjúə(r)], pure [pjúə | pjúə(r)]. この場合米音では [t, d, n] の後は [j] が落ちることもある: mature [mæt(j)júə | -tjúə(r)], endure [ɪnd(j)júə | -djúə(r)], manure [mæn(j)júə | -njúə(r)].
- 9 [ɑə | ɑ:] 米音では 3.1.5 の [ɑ] の後に [ə] が続く。一方英音では 3.2.2 の [ɑ:] と全く同じ長母音である: far [fáə | fá:(r)], garden [gáədn̩ | gá:-].
- 10 [ɔə | ɔ:] 米音では 3.2.3 の [ɔ:] よりやや高目から [ə] へ移行する。一方英音では 3.2.3 の [ɔ:] と同じ長母音: horse [hɔəs | hɔ:s], forty [fɔəti | fɔ:tɪ]; war [wɔə | wɔ:(r)], wharf (h)wɔəf | (h)wɔ:f, quarter [kwɔətə | kwɔ:tə(r)].
- 11 [ɔə, ə | ɔ:] 英音は上と同じだが、米音ではやや保守的な話し手には 3.3.10 ではやや低目の [ɔə] を用い、このグループの語では出発点の高目の [oə] を用いて区別する人がある。この人たちは hoarse [hɔəs] と horse [hɔ:s], wore [wɔə] と war [wɔə] とを区別して発音する。しかし 10 と 11 とを区別しない米国人も多い: soar

[sɔə, sɔə | sɔ:(r)], roar [rɔə, rɔə | rɔ:(r)]; mourn [mɔən, mɔən | mɔ:n].

3.4 三重母音

- 1 [aɪə | aɪə]
 - 2 [aʊə | aʊə] この 1 と 2 はそれぞれに二重母音の [aɪ] または [aʊ] に [ə] ないし [ə] が続いたもので、2 音節となることが多く、完全な三重母音とは言い難い。英音では [aɪə] は [aə], [aʊə] は [oə] のように二重母音化する傾向が強い: fire [fáɪə | fáɪə(r)]; lyre [láɪə | láɪə(r)]; flour [fláʊə | fláʊə(r)]; power [páʊə | páʊə(r)].
- 3.5 米音では [ɪə, eə, uə, juə, aɪə, aʊə] の直後に弱母音が続くときには本辞典では [ɪ(ə)r, e(ə)r, u(ə)r, ju(ə)r] のように表わす。この場合の [ə] は [ə] がごく弱いまたは消失することを示す: experience [ɪks-
pɪ(ə)riəns | -pɪəri-], engineering [ɛndʒən(ə)rɪŋ | -nɪər-]; airy [é(ə)rɪ |
éəri]; tourist [tú(ə)rɪst, -rɪst | túərɪst], curious [kjú(ə)rɪəs | kjúəri-].
従ってこのような語で [r] の前の [ə] を発音しない人にあるは serious
[sɪ(ə)rɪəs] と Sirius [sɪrɪəs], Mary [mé(ə)rɪ] と merry [méri = méri]
とは同じ発音となる。なお [aə, əə, oə] の直後に弱母音が続くときには
[ə] は聞こえない。本辞典では [a:ɪr, ɔ:r, o:r] のように示す: starry
[stá:ri | -rɪ]; glory [glɔ:ri, gló:ri | glɔ:ri].

3.6 弱母音

- 1 [ɪ] 語頭および語中に現われる。3.1.1 の強母音の [ɪ] よりもやや後寄り [ə] に近く、日本語の「イ」とは違ったあいまいな響きをもつ: ignore [ɪgnɔə | ɪgnɔ:(r)], indulge [ɪndʌldʒ], vanish [væniʃ]; symbolic [sɪmbálɪk | -bɔl-]; village [vɪlɪdʒ]; bargain [báəgm̩ | bá:-].
- 2 [i | ɪ] (1) -y で表わされる語末およびそれに派生語尾の -s や -ed が付いて y が ie になったときに現われる。米音では 3.2.1 の [i] に近く、英音では上の [ɪ] より更に下って実質的には後寄りの [e] 程度の母音となる: happy [hápi | -pɪ]; body [bádi | bɔdi], cities [sítɪz | -tɪz], carried [kárid, kér- | kérid], (2) 母音の前でも同様: trivial [trɪvɪəl | -vɪ-], sociality [səʊʃiæləti | səʊʃiæləti], piteous [pítɪəs | -tɪ-]; ただし [ɪ] の前では英音でも [i]: eightieth [éɪtɪθ, -tɪθ | -tɪθ, -trəθ].
- 3 [ə] (1) 語末では日本語の弱い「ア」に近い。舌の位置は次の (2) の [ə] よりかなり低くこれと区別するために [v] で表わされることがある: China [tʃáɪə], sofa [sóʊfə | sú-]. (2) 語頭および語中に現われる標準的な [ə] は舌の位置が 3.2.5 の [ə:] に近く弱いあいまいな母音であるが、周囲の音や綴り字の影響でかなりの変動がある。特に綴り字が i のときには 3.6.1 の [ɪ] に近いものが現われることが多い: about [əbáut], ahead [əhéid]; oblige [əbláɪdʒ], offend [əfénd]; employ [ɪmplɔɪ, əm- | ɪm-]; irregular [ɪrégjʊlə, ə- | ɪrégjʊlə(r)].
語中の [ə] は i, e, a, o, u, y のすべての母音に対応するが、特に綴り字が i のとき英音の [ɪ] に対して米音では [ə] が現われることが多い: April [éprəl | -prəl, -prɪl], possible [pásəbəl | pásə-, -sɪ-]; television [téləvɪzən | télɪvɪzən, -lə-], moment [móumənt | móu-]; capable [kéɪpəbəl]; contain [kántéɪn], common [kámən | kɔm-]; August [ɔ:gst], album [éltəbm̩]; homicide [háməsaɪd | hɔmɪ-], dominate [dámənənt | dɔmɪ-].
- 4 [ə | ə] 米音では 3.2.5 の [ə:] を短く弱く発音したもの、英音では上の [ə] (1) (2) と同じ。[ə:] | ə:] と同じく綴り字は母音字 + r である: particular [pətɪkjʊlə | pətɪkjʊlə(r)], standard [stændəd | -dəd]; butter [bátə | -tər], understand [ʌndəstænd | -də-]; circumference [sə:kəmfə(r)əns | sə-]; actor [éktə | -tər], forget [fəget | fə-]; murmur [mɔ:mə | mɔ:mə(r)], Saturday [sætədi, -də | -tə-]; martyr [máətə | má:tə(r)].

- 5 [o(u) | ə(u)] 3.3.5 の [ou | əu] が弱く発音されると、二重母音性を失って [o | ə] となる傾向がある。このようなとき本辞典では [o(u) | ə(u)] と示した: November [nəvémbə, nə(u)- | nə(u)vémbə(r)], location [ləʊkəʃən | lə(u)-].
- 6 [ʊ] 3.1.7 の [ʊ] が弱く短く発音されたもの。[ɪ] に続くことが多く、この場合唇のまるめは殆んど失われているので [jə] と表わしてもよい: monument [mánjʊmənt | mɔn-], regular [régjʊlə | -lə(r)].
- 7 [u | ʊ] 上の母音の後に母音が続くときには米音では舌の位置がやや高くなり [u] に近づく: usual [jú:ʒʊəl | -ʒʊəl], February [fébruəri | -brʊəri], continuous [kəntínjuəs | -nju-].

3.7 鼻音化母音 (nasalized vowel)

フランス語からの借用語が十分に英語化しない場合には、フランス語特有の鼻音化母音が用いられることが多い。フランス語の鼻音化母音 [ɛ̃, ɑ̃, ɔ̃] は舌の位置から言えば [æ̃, ɑ̃, ɔ̃] で表わしてもよい。これらが英語化した場合、本辞典では原則として次のように示す。

- [ɛ̃] → [é:(ŋ), ɛ:(ŋ)] vin [vé:(ŋ), vɛŋ]
[ɑ̃] → [ā:(ŋ), ɔ:(ŋ), a:(ŋ), ɔ:(ŋ)] engagement [ā:(ŋ)ga:gmá:(ŋ), ɔ:(ŋ)-
ga:gmá:(ŋ), ā:(ŋ)ga:gmá:(ŋ), ɔ:(ŋ)ga:gmá:(ŋ)]
[ɔ̃] → [ɔ:(ŋ), ɔ:(ŋ)] bon [bá:(ŋ), bɔ:(ŋ)]

後続の子音が [p, b, m] のときには [g] は [m] に, [t, d, s, z] のときには [n] に変わる: Mont Blanc [mɔ̃:(m)blɑ̃:(g), -blɑ̃:(g), mɑ̃:(m)-blɑ̃:(g), -blɑ̃:(g)], danseuse [dɑ̃:(n)sɑ̃:(z), dɑ̃:(n)-, dɑ̃:(n)-, -sɑ̃:(z)].

4. 英語の子音

4.1 閉鎖音

1 [p] (無声), [b] (有聲) 「パ」行, 「バ」行の子音と同じく上下の唇で閉鎖が行なわれる: pipe [paip], supper [sʌpə | -pə(r)], bulb [bʌlb], about [əbaʊt].

2 [t] (無声), [d] (有聲) 「タ, テ, ト; ダ, デ, ド」の子音では一般に舌先が歯茎に付くに対して, 英語の [t, d] では舌先が歯茎にあって閉鎖をつくる: taught [tɔ:t], deed [di:d], London [lʌndən].

3 [k] (無声), [g] (有聲) 「カ」行, 「ガ」行の子音と同じく, 後舌面と軟口蓋とで閉鎖が行なわれる: kick [kɪk], music [mjʊ:zɪk], cactus [kæktəs], cold [kəʊld | kəʊld], cut [kʌt]; gag [gæ(ɪ)g], signal [sɪgnəl, -nɪ], go [gəʊ | gəʊ], gun [gʌn].

4 無声閉鎖音 [p, t, k] が音節の初めにあって次に強母音が続くときには帯気音 (aspirate) となり, 精密には peak [pʰi:k], time [tʰaɪm], cook [kʰʊk] のように [pʰ, tʰ, kʰ] で表わすが, 本辞典では特に示さない。

5 [t] 米音では次のような位置でしばしば「有聲の t」(voiced t) と呼ばれる音が現われる。本辞典ではこの音が現われる可能性のあるときには, [t] を用いて示した。これはこの音が必ず現われるとか, この音を用いることが好ましいという意味ではない。「有聲の t」は多くの場合, 完全な閉鎖音ではなく「歯茎はじき音」(tap) の一種で, 舌先が [d] のように歯茎に密着せず, 瞬間的に軽く触れるだけの音で, 精密には [ɾ] で表わし, 日本語の「ラ」行の子音に多少似ている。このため pity [pɪtɪ] が「ピリー」, water [wɔ:tə] が「ウォーラー」のように聞こえることがある。「有聲の t」は次のような位置に現われる。

(1) 母音の後で弱母音の前: latter [lætə], liberty [lɪbəti].

(2) 母音の後で音節主音的な [l] (6 参照) の前: battle [bætl], little [lɪtl].

(3) [l] の後で弱母音の前: filter [fɪltə], salty [sɔ:ltɪ].

(4) [n] の後で弱母音の前: twenty [twɛntɪ], winter [wɪntə]. この場合は [t] と先行の [n] とが合体して「はじき鼻音」(nasal tap) [ɾ] となり, 日本人には twenty [twɛntɪ] は「トウェニー」, winter [wɪntə] は「ウィナー」のように「ナ」行の子音のように聞こえることがある。

米音では [d] もしばしば上のような位置ではじき音になることがあるが, 本辞典では特に示さない。

4.2 摩擦音 (fricative)

1 [f] (無声), [v] (有聲) 日本語の「フ」の子音 [ɸ] が上下の唇が狭まるのに対して, 英語の [f, v] は上の前歯と下唇とが接近してできる摩擦音である: five [faɪf], suffer [sʌfə | -fə(r)]; phase [feɪz]; voice [vɔɪs], save [seɪv].

2 [θ] (無声), [ð] (有聲) 舌先を上の前歯の裏または上下の歯の間に接近させてつくられる: three [θri:], bath [bæ(ɪ)θ | bɑ:θ], healthy [hɛlθɪ | -θɪ]; this [ðɪs], bathe [beɪð], either [i:ðə, əɪðə | əɪðə, i:ðə].

3 [s] (無声), [z] (有聲) 日本語の「サ, ス, セ, ソ」の子音 [s] とほぼ同じだが, それよりも舌の緊張や摩擦が強い: cease [si:s], massive [mæsvɪs]; circus [sɜ:kəs | sɜ:-]; zoo [zu:]; pansy [pænsɪ | -zɪ], rise [raɪz].

4 [ʃ] (無声), [ʒ] (有聲) 日本語の「シ」の子音 [ɕ] より舌の緊張や摩擦が強く, 重く暗い感じがする。また唇がまるめられて発音されることもある。[ʒ] はフランス語からの借用語を除いては語頭・語末に現われることはない: ship [ʃɪp], cash [kæ(ɪ)ʃ]; mansion [mænsən]; station [steɪʃən]; special [speʃəl]; pleasure [pleʒə | -ʒə(r)]; seizure [si:ʒə | -ʒə(r)]; occasion [əkeɪʒən].

5 [h] (無声) 「ハ, ヘ, ホ」の子音とほぼ同じで, 母音の前にしか現われない。口腔中ではせげめはなく, 唇や口のかまへは次に続く母音とほぼ同じであるが, 声帯は震動せず, 呼気が口腔の壁に当たってわずかな摩擦の音が生じる: high [haɪ], head [hed]; whole [həʊt | həʊt], behind [bɪhaɪnd, bə-].

4.3 破擦音 (affricate)

破擦音は閉鎖音の破裂が緩やかに起こるためにいったん直後に調音点を同じくする摩擦音が続いてから閉鎖が完全に開放の状態に移るものをいう。

1 [tʃ] (無声), [dʒ] (有聲) 日本語の「チ, ジ」の子音に近い。舌端は歯茎の後部から硬口蓋の前部の付近につく。唇がまるめられて発音されることもある: church [tʃɜ:tʃ | tʃɜ:tʃ]; pitcher [pɪtʃə | -tʃə(r)]; habitual [həbɪtʃuəl | -tʃu-], question [kwɛstʃən]; judge [dʒʌdʒ]; adjust

[ədʒʌst]; giant [dʒaɪənt], gym [dʒɪm]; soldier [səʊldʒə | səʊldʒə(r)].

★ [ʃ, ʒ] は音声学的には二つの音であるが, 音韻論的には一つの音素と考えるのが適当である。この意味で本辞典では [ʃ, ʒ] のような合字の記号を使用している。

2 [tr] (無声), [dr] (有聲) 舌先が歯茎の後部につき, 唇がつき出されることがある。[tr] が強音節に現われるときは [t] だけでなく [r] も無声となる。[tr, dr] は聴覚的には [ʃ, ʒ] と似ていて, 日本人の耳には「チ, ジ」に近く聞こえることもある: tree [tri:], dry [draɪ].

3 [ts] (無声), [dz] (有聲) 日本語の「ツ, ズ」の子音に近いが英語では真の意味での破擦音ではなく, 普通は -t, -d で終わる語に派生語尾の -s が付いたときに現われる: cats [kæts]; ends [ɛndz].

4.4 鼻音 (nasal)

口腔のどこかで閉鎖が行なわれるが, 口蓋垂および軟口蓋の後部が下にさがって呼気が鼻腔へも抜け, 鼻腔での特有の共鳴を伴う音。英語の鼻音は一般に有聲である。

1 [m] [b] と同じく上下の唇が閉じられる: maim [meɪm], summer [sʌmə | -mə(r)].

2 [n] [t, d] と同じく舌先を歯茎にあてて閉鎖をつくる: nine [naɪn], dinner [dɪnə | -nə(r)].

3 [ŋ] [k, g] と同じく後舌面と軟口蓋とで閉鎖をつくる。この音は語頭には現われない: hang [hæŋ], singing [sɪŋŋɪŋ]; ink [ɪŋk], finger [fɪŋgə | -gə(r)].

4.5 側音 (lateral)

口腔の通路の中央部が舌によって閉鎖され, 呼気が舌の両側または片側を通して発音される音をいう。英語の側音は音素としては /l/ 一つであるが, その中かなり音色の違う次の 2 種の異音を含む。

1 [l] 舌先が歯茎のあたりで閉鎖をつくる。母音および [j] の前に現われ, 普通は有聲である。明るい感じを与えるので「明るい l」(clear l) と呼ばれる: light [laɪt], million [mɪljən], silly [sɪli | -li].

2 [ɫ] 前者に比べて暗い音色を持った, 「暗い l」(dark l) と呼ばれ, 子音の前および語末に現われる。後舌面が軟口蓋に向かってより上がるため, 「ウ」のような響きを持つ。従って feel [fi:l], bulb [bʌlb] などは「フィュー」, 「パウブ」のように聞こえることがある。6 で説明する子音の後の音節主音的な [l] において特にこの音色が著しく people [pi:pəl], table [teɪbəl], final [faɪnəl] などはそれぞれ「ピープー, テイプー, ファイヌー」のように聞こえる。

4.6 半母音 (semivowel)

いずれも音学的には母音であるが, きこえ (sonority) がより大きい母音が後続するために音節主音とならず, 子音としてのはたらきを持つもの。

1 [j] [i] または [ɪ] の位置から急速に後続する母音へと移行する: yield [ji:ld], yard [jɑ:d | jɑ:d]; onion [ʌnjən], familiar [fəməljə | -ljə(r)]. [ju:] については 3. 3. 6 で扱った。

2 [w] [u] または [ʊ] の位置から急速に後続する母音に移行する: way [weɪ], wood [wú:d]; which [hɪwɪtʃ]; quick [kwɪk]. なお wh [hɪw] の発音については本文の wh- の項を参照。

3 [r] 米音では 3. 2. 5 の [ə:] と同じかまへ。つまり舌先を歯茎の後部へ向かってもち上げて少し奥の方へそり返すか, または舌の中央部を少し持ち上げて後に少しずらした位置から急速に後続する母音へ移行する。英音では母音間ではじき音 (tap) の [ɾ] を用いる人もいるが, 本辞典では特に示さない: read [ri:d], run [rʌn]. 本辞典では [r] は母音の前か母音間においてのみ用い, 母音のあとにくるときには先行の母音とともに二重母音とみなして [ə] の記号で表わす (3. 3. 6-3. 3. 11 を参照)。

5. 音の脱落

母音または子音が脱落する発音が普通である場合には, 脱落する母音または子音を () で囲んで示す: mineral [mɪn(ə)rəl], dangerous [dɛɪndʒ(ə)rəs], distinct [dɪstɪŋk(t)], attempt [ətem(p)t]. ただし, 本辞典では複合語の発音はときにはアクセント記号だけを付けて示すのが原則なので, 子音の脱落の表示は省略した: breast-deep は詳しくは [brɛs(t) di:p], [ɪə(r), əə(r), uə(r)] の [ə] については 3. 5, [əʊ(r)] の [ʊ] については 3. 6. 5 を参照。

6. 音節

machine という単語は [mə] と [ʃi:n] の二つに分れるように感じられる。また introduction は [ɪn], [trə], [dʌk], [ʃən] の四つに区切られる感じがする。このように前後に切れ目の感じられる音声上の単位を音節という。音節は他より際立ってきこえ (sonority) の大きな一つの音, またはそれを中心に前または後にそれよりきこえの小さな音がついてできる。machine ののはじめの音節では [ə] の前に [m] がつき,

後の音節では [i:] の前に [j], 後に [n] がつく。音節の中心となるこのようなきこえの大きな音を音節主音 (syllabic) と呼び、普通は母音がこのはたらきをする。しかし prism [ˈprɪzm] の [m], sudden [ˈsʌdn̩] の [n], tunnel [ˈtʌnəl] の [l] のように子音 (主として [m, n, l]) が音節主音となることもある。子音が音節主音となったときには [m, n, l] のように記号の下に [̩] をつけて示す。

7. 英語のアクセント

7.1 語アクセント

語中のある音節が強く発音されたとき強アクセント (strong accent) があるという。一方ある音節が弱く発音されたときにはアクセントがない。またはより正確には弱アクセント (weak accent) を受けるという。また強アクセントを二つに分けて最も強いものを第一アクセント (primary accent), その次の段階を第二アクセント (secondary accent) と呼び、前者には母音記号の上に [ˈ] を付け、後者には [ˌ] をつけて示す。また弱アクセントには一般に記号を付けない。例えば internationalize では強い音節から小さな数字を用いると in-ter-na-tion-al-ize のように音節の数だけアクセントに段階があるわけであるが、一般には [ɪntəˈneɪʃ(ə)nəlaɪz] のように 3 段階で表わす。

1 音節の pen, time, cool などの [p, t, k] は 4.1.4 で見たように帯気音であることから強アクセントを受けていることが明らかである。また pen と pencil, time と timing, cool と cooler とを比較すると、1 音節語のアクセントの強さは第一アクセントであることが分る。このような理由で本辞典では 1 音節語には一般に第一アクセントの記号 [ˈ] を付けている。

7.2 句アクセントおよび文アクセント

(1) 複合語のアクセント

二つ(以上)の語が結合して単語のように一つのまとまった意味をもつ複合語の場合には、本辞典では次のように個々の単語のアクセントではなく複合語としてのアクセントを示した。例えば airport では air および port はそれぞれ第一アクセントを持つ [ˈeə|ˈpɔ:t], [ˈpɔ:t, ˈpɔ:t] であるが、複合語となったときには port の第一アクセントは第二アクセントに落ちて [ˈpɔ:t, ˈpɔ:t | ˈpɔ:t] となり全体としての発音は [ˈeəpɔ:t, -pɔ:t | ˈeəpɔ:t] となることを示す。

(2) アクセントの移動

強アクセントを二つもつ語は単純に発音される場合には語末に近い方がより強いが、直後に第一音節に第一アクセントを持つ語が続くときには語頭に近い方へ第一アクセントが移動することがある。そのようなとき本辞典では Chinese Revolution に対して Chinese lantern のように示していることがある。しかしこれはリズムの関係でそのような傾向があるので、必ずそのように発音せよという意味ではない。

(3) 強形と弱形

英語の単語の中で冠詞・人称代名詞・不定代名詞・関係詞・助動詞・前置詞・接続詞などは文中では弱く発音されることが極めて多い。これらの語の中で特に 1 音節の語は、弱く発音されたときには母音が弱体化して、強く発音されたときは違った形となる。前者を弱形 (weak form), 後者を強形 (strong form) と呼ぶ。本辞典では強形と弱形とを次のように示した。

a [ə; ɛɪ, ɛɪ], can [kən, ([k, g] の前ではまた) kæn; kæn, kæn], do (auxil. v.) [ɪ 子音の前) də, (母音の前) du | du; dù; dú:], me [mi; mi:, mí: | mi; mi:, mí:], of [əv, (母音の前ではまた) v, (有声子音の前ではまた) ə, v, (無声子音の前ではまた) ə, əf, f; əv, əv, əv, əv | əv, əv], that (conj.) [ðæt], your [jʊə, jə, jə, jə; jùə, jə, jə, jùə, jə, jə, jə | jə: (r), jə: (r), jə: (r); jà: (r), jà: (r), jà: (r), jà: (r)].

8. 外国語および特殊音

日常あまり用いられない外国の人名・地名などでは原地の国語の発音を示したものがある。その際には国際音声学協会 (IPA) の発行している *The Principles of the International Phonetic Association* (1949) の方針および記号に従った。これは各国語の音声をもととして簡略表記 (broad transcription) で記したものである。英語で普通用いない音、英語以外の国語の表記に用いられる音声記号や、英語とはやや違った約束で用いられる記号を簡単に説明すれば次の通りである。

- [ɐ] [ə] よりも舌の位置の低い中舌母音: Kaiser [G. káizr̩], Gama [Port. géme].
- [c] 硬口蓋と前舌面で作られる閉鎖音で、英語の [tʃ] に似ている: kutya [Hung. kúca].
- [ç] 日本語の「ヒ」[çi] の音で、前舌音と硬口蓋との間でできる無声摩擦音: ich [G. ɪç].
- [ɕ] 舌端と硬口蓋前部との間でできる無声摩擦音で、日本語の「シ」[çi] の音: O'swiecim [Pol. ɔɕfjɛtɕim].
- [i̯] [ə] よりも舌の位置の高い中舌母音: kuibyshev [Russ. kújbiʃɪf].
- [j̥] ロシア語・ポーランド語などで前の子音が口蓋化 (palatalization) を受けていることを示す: Lenin [Russ. lʲénɪn], Poznań [Pol. pɔ́znani̯].
- [j̥] [c] に対する有声閉鎖音で、英語の [dʒ] に似ている: Nagy [Hung. náj], Gujarati [Hindi gújratɪ].
- [ɬ] 硬口蓋と前舌面で出す側音 (lateral) で、英語音の [l] に近い: llano [Am. Sp. láno].
- [ɲ] 硬口蓋と前舌面とで閉鎖が行なわれてつくられる鼻音 (nasal): Montaigne [F. mɔ̃tɛɲ].
- [ŋ̊] そり舌 (retroflex) の [n] の音: Paṇini [Hindi paɳɪni].
- [ø] [e] を発音しながら同時に唇をまるめる母音: peu [F. pø], Göteborg [Swed. jø.təbɔ́rj̥].
- [œ] [e] を発音しながら同時に唇をまるめる母音: jeune [F. ʒœn], Köln [G. kœln̩].
- [rr̩] スペイン語では [r] は単動音 (flap) の [ɾ] を表わすため、動音 (trill) の r を [rr̩] で示す: río [Sp. r̩r̩jo].
- [ɹ̥] 舌先と歯茎後部との間でつくられる摩擦音: Chichihaerh [Chin. tʃʰíxǎ̌h], Jehol [Chin. t̩x̌ɔ̌].
- [ɹ̥] 舌尖をふるわせながら歯茎との間でつくられる摩擦音で、[ɹ̥] に似た響きをもつ: Dvořák [Czech dvóɾa:k].
- [ɐ̃] ポルトガル語やブラジル語で [ɾ] は単動音 (flap) の [ɾ] を表わすため、口蓋垂の動音 (trill) の r を [ɐ̃] で示す: arroba [Port. ɐ̃ɐ̃bɐ, Braz. ɐ̃ɐ̃bɐ].
- [ʂ] そり舌音の [s] 音: Changsha [Chin. tʃáŋʂá].
- [ɬ̩] 歯茎で舌打ちする時出る音: tut-tut [ɬ̩].
- [t̩] そり舌の [t]: Changchun [Chin. tʃʰáŋt̩ʂʊn̩].
- [u̯] 東日本の「ウ」の母音で唇をまるめない [u̯] の音: ugh [ú:u̯, uh̩].
- [x̥] スコットランド発音の loch [lɔx̥] の音で、後舌音と軟口蓋の間でできる無声摩擦音: ach [G. ɔx̥].
- [y̥] [i̯] を発音しながら同時に唇をまるめる母音: julienne [F. ʒy-ljɛn], Übermensch [G. ý:bemɛn̩ʃ].
- [ɣ̥] [i̯] を発音しながら同時に唇をまるめる母音: Deutschland [G. dɔ́ʏtʃlant̩].
- [ɣ̥] [y̥] に対応する半母音: nuance [F. nɔ̃s̥].
- [v̥] 唇をまるめずに [o] を発音した音: Kaifeng [Chin. kʰáifɛŋ̊].
- [ʋ̥] [x̥] に対する有声音: Georg [Dan. gé:ɔɾ̥].
- [ɸ̥] 両唇の間を狭めて出す無声摩擦音で、日本語の「フ」[ɸu̯] の音: phew [ɸ̥].
- [ʔ̥] 声門を急に突破して出す破裂音で、強調するとき語頭の母音の前に用いられることがある: absolutely [ʔ̥æbsəlu:tli], nope [nóuʔ̥|núʔ̥], Alfred [Dan. álʔ̥fræð̥]. 咳払いでは [ʔ̥] の誇張された音が出る。
- [ʰ] 母音または子音の後で声門を瞬間的に閉鎖させることを表わす: Hans [Dan. hánʰs̩].
- [ʰ] 閉鎖子音が帯気音 (aspirate) であることを表わす: Tang [Chin. tʰáŋ̊].
- [ʰ][ʰ][ʰ] [ʰ][ʰ][ʰ] それぞれ中国語の第一、第二、第三、第四声を表わす: Kaifeng [kʰáifɛŋ̊], Han Yü [xán̊ ʔ̥], Lüshun [l̩ʃ̊s̊n̊].
- [.] [l̩] [m̩] のように用い、その音が無声であることを示す: hem [m̩̥], ahem [m̩̥m̩̥], Dolgellau [Welsh dɔlgéla(̩i̯)].

語 源 解 説

1. 英語辞典と語源

1.1 英語辞典に多少の語源説明を加えることは、最近の一般的傾向のようである。英国の *Concise Oxford Dictionary* や米国に数多い college dictionary にはかなり詳しい語源記述があり、*Pocket Oxford Dictionary* や *Concise Heritage Dictionary* のような小型辞典にも簡単ながら語源欄がついている。英和辞典の場合でも、中型以上のもので何らかの形で語源に言及しないものは、むしろまれであろう。

語の慣用法は直接語源によって左右されるものではないが、一方新しい意味・用法でも遡っていくと原義ないし古義に関係づけられる場合が少なくない。ことに古くから用いられてきた語の場合には、そのことばの年輪を明らかに知るためにも語誌的・語源的知識が不可欠である。英語辞典の歴史をみると、語源が最初に取り上げられたのは、1656 年出版の Thomas Blount, *Glossographia* であり、以後 Edward Phillips, *The New World of English Words* (1658), Elisha Coles, *An English Dictionary* (1676), Stephen Skinner, *Glossographia Anglicana Nova* (1679)、編者不詳の *Glossographia Anglica Nova* (1707) などいずれも語源解を標榜している。しかし一般英語辞典における語源欄の位置を確立したのは、語源記述を英語辞典に不可欠の要素と考えた Nathan Bailey の *A Universal Etymological English Dictionary* (1721) および *Dictionarium Britannicum* (1730) であった。後者の再版 (1736) こそ、かの Dr. Johnson の苦心になる。最初の本格的国語大辞典 *A Dictionary of the English Language* (1755) 2 巻の底本として用いられたものである。Bailey や Johnson の語源記述は William Somner (1659), Skinner (1671), Francisus Junius (1677) によるところ大きく、独自の寄与は少ないといわれる。

Johnson の辞典でも語源記述は一般に甚だ簡略で、Dog [dogge, Dutch.], CAT [katz, Teuton. chat, Fr.], Do [don, Sax. doen, Dut.] という程度であり、その限りでは破綻を示していない。しかし、少し立ち入った記述になると、Have [haban, Gothick; habban, Saxon; hebben, Dutch; avoir, French; avere, Ital.] のように音韻論的には対応しないロマンス語形と結び付けたり (5.2 参照)、GOD [god, Saxon, which likewise signifies good. The same word passes in both senses with only accidental variations through all the Teutonick dialects.] のように、単なる形態上の類似から god を good と関係づける安易な語源説に甘んじているような例が見られる。このような語源に対する後述性は、1828 年出版の Noah Webster 編 *An American Dictionary of the English Language* (現在の Webster 大辞典の元版) においても著しい。

1.2 一般に、18 世紀以前の語源研究はなお恣意的な面が少なくなく、科学的厳密性を欠くものであったことは、18 世紀末の語源辞典、例えば G. W. Lemon, *English Etymology* (1783) にも歴然としている。Lemon は foot をギリシャ語の ποταμός ‘歩く’ からの派生とし、garden をギリシャ語 γάρδος, ラテン語 gyrus ‘堀や垣根などで囲んだ土地’ に関係づけている。これらもまた古典語と英語との間に見られる。後述する音韻対応を無視したもので、「語源学においては母音は何ら関与せず、子音もごく僅かしか関与しない」という、フランスの文学者 Voltaire の有名な語源学批判を甘受すべきものである。

2. 印欧語族

2.1 しかし、科学的な語源研究は上記 Lemon の語源辞典出版から僅か 3 年後、英国の東洋学者 Sir William Jones が司法官としてインドに在任中発表した論文をもって緒につく。それは、インドの最古層の言語であるサンスクリットとヨーロッパの古典語であるギリシャ語・ラテン語との間の著しい言語特徴の類似性を指摘し、これらの言語が同一の母語 (すなわち印欧基語) から派生したものと推定する画期的な研究であった。以後多くの比較言語学者の研究や古代語の発見によって、今日では印欧基語とこれから派生した諸言語を含む印欧語族 (Indo-European family) の系譜がかなり明らかになっている。

2.2 ここにいう印欧基語 (Proto-Indo-European) とは、紀元前 3-4 千年頃まではほぼ単一の言語グループをなしていたと推定される言語である。この言語から今日までに分化発達した諸言語は、西はアイスランド、アイルランド、東はトルケスタン、インドの地域に跨り、

これに今日英語の用いられるオーストラリアや北米大陸などを加えれば、ほとんど地球を取り巻く広大な地域に及んでいる。こうして、世界の総人口の半数に近い約 20 億に及ぶ言語人口をもつ印欧語族は、数多い語族の中でも、文化史的に最も重要な語族の一つといつてよいであろう。次に印欧語族の分類とこれに属する主要な言語名をあげておく。〔I〕に包まれたものは古代語や消滅した言語を示す。

インド語派 (Indic)

[Sanskrit, Prakrit] — Hindi, Bengali, Urdu

イラン語派 (Iranian)

[Old Persian] — Persian, Kurdish

[Avestan] — Pashto

アナトリア語派 (Anatolian)

[Hittite]

[Luwian]

[Lycian]

アルメニア語 (Armenian)

トカラ語 [Tocharian]

ギリシャ語 (Greek)

イリュリア語 [Illyrian]

アルバニア語 (Albanian)

イタリック語派 (Italic)

[Latin] — Italian, French, Spanish, Portuguese, Rumanian

[Oscan, Umbrian]

ケルト語派 (Celtic)

[Goidelic] — Gaelic, Manx

[Brythonic] — Welsh, Breton

ゲルマン語派 (Germanic) ⇒ 2.3

バルト語派 (Baltic)

[Old Prussian]

Lithuanian, Latvian

スラヴ語派 (Slavic)

Slovene, Serbo-Croatian, Bulgarian

Czech, Slovak, Polish

Russian, Ukrainian

2.3 英語の属するゲルマン語派は、比較的有力とされている分類法で示すと次のようになる。

東ゲルマン語群 (East Germanic)

[Gothic]

北ゲルマン語群 (North Germanic)

[Old Norse] — Icelandic, Norwegian, Swedish, Danish

北海ゲルマン語群 (North Sea Germanic)

[Old Frisian] — Frisian

[Old English] [Middle English] — English

[Old Frankish] — Dutch, Flemish

[Old Saxon] — Low German

内陸ゲルマン語群 (Inland Germanic)

[Old High German] — German

3. 英語語源学

3.1 英語を初めとするヨーロッパ諸語の語源研究が、19 世紀末から 20 世紀前半にかけてめざましい発達をとげた印欧比較言語学の成果に負うところ極めて大であることは、多言を要しないであろう。英語語源学は、第一に英語がゲルマン語派に属する北海ゲルマン語群の一言語であり、第二にゲルマン語派が上に述べた印欧語族の一語派であることを前提としている。そこで、印欧基語に遡る英語単語の語源記述では、印欧・ゲルマン比較言語学の成果が、また古期英語 (Old English, 700-1100; 略 OE) 以降の記述には英語史の研究成果が利用されることになる。つまり、英語の語源研究には、現代英語から中期英語 (Middle English, 1100-1500; 略 ME; ただし、本辞典の語源記述では 1400-1500 は ME とせず 15C とした)、古期英語の段階にまで遡る英語の内の史的部分と、さらに遡ってゲルマン基語 (Proto-Germanic)・印欧基語 (Proto-Indo-European) の段階を扱う英語の外史的の部分とがあり、ある英単語の語源を特定するためには、内史・外史を通して、形態の連続性と同時に意味の連続性が証明されなければならない。その際、内史的考察が外史的考察に先行すべきことはいうま

でもない。

3.2 例えば, cow の語源は本辞典で次のように記述されている。

cow¹ [OE cū < Gmc *kō(u)z cow (Du. *koe* / G *Kuh*)
← IE *g^wōus ox, bull, cow (L *bōs* ox / Gk *boūs* / Skt
gāus): cf. beef]

語源欄の読み方について注意すると、このように OE に遡る語はただちに OE の語形を記し、ME の語形をあげないのを原則としてある。OE から ME, ME から ModE への発達は英語音韻史の知識で十分理解されるから、例外的な場合を除き省略したのである。しかし、cow の語源が古期英語 cū [ku:] であるというためには、この [ku:] という音が中期英語末から近代初期にかけて生じた大母音推移 (Great Vowel Shift) という組織的な音変化によって [kuu] [kau] をへて [kau] となったこと、また cū → cow という綴り字上の変化は [u:] 音を表わすのに ou, ow を用いたノルマン字生書の書記法によることを明らかにして形態上の連続性を確認すると共に、その意味「牝牛」が基本的に変わることなく連続している、という意味の連続性の確認が前提となっている。

3.3 英単語の中には dog のように OE *docga* より古く遡ることができない場合もあるが、cow の場合は上記語源欄の示すように OE cū が最終的語源ではない。英語と同語派に属する他のゲルマン諸語に OE cū に対応する語 — OFris. *kū*, OS *kō*, OHG *chuo*, ON *kýr* — が存在することから、古代ゲルマン人が用いた言語、いわゆるゲルマン基語の語彙に *kō(u)z が推定できる。(*印は A. Schleicher 以来、その語が文証されないが理論上推定される語形であることを示す。) 我々はさらに、このゲルマン語に対応する語形を欧亜大陸の諸言語に、Olr. *bō*, L *bōs* (cf. *boss*), Toch. (A *ko*, ki; B *keu*), Gk *boūs*, Arm. *kov*, Latv. *gūovs*, OChSlav. *govędo*, Aves. *gāush*, Skt *gāus* のように見出し、これらの語形の溯源する印欧基語 *g^wōus ‘牛’ を帰納的に推定することができ、上記語源欄はこの過程を簡略に [OE cū < Gmc *kō(u)z ... < IE *g^wōus ...] としている。(A' < A は A' が A の音法則的発達であることを示す。) その際ゲルマン基語の次に、同じくこの基語から発達した同族語を例示するが、一般読者の便を考慮して、通例オランダ語・ドイツ語の現代語形をあげてある。(なお Du. と G の間の斜線は異なる言語を併記するときの区切りとして用いている。) また、印欧基語の次に同じように、ラテン語・ギリシャ語の同族語形をあげた。ギリシャ語の転写法は、サンスクリット・ヘブライ語・アラビア語・ロシア語と共に、本文中の alphabet の項の表に示してある。ギリシャ文字のローマ字転写は、慣用的なラテン語式によらなかったところがある。すなわち kappa は c でなく k, upsilon は y でなく u, chi は ch でなく kh, また軟口蓋音 (k, g など) の前の gamma も n でなく g で表記した。しかし、英語におけるギリシャ借入語は通例ラテン語を経由しているの、synchronize のように、いずれもラテン語式 (c, y, ch, n) の形をとっていることはいうまでもない。

3.4 cow の語源はこのように IE *g^wōus に遡ることが分ったが、これからさらに溯源することは可能であろうか。大多数の語の場合、印欧語以前に遡ることは困難だが、一説によると、*g^wōus は言語の系統が不詳とされるシュメール語 (Sumerian) *gu* (< **gud*) ‘(種)牛’ の借入で本来擬音語であるという。また古代中国語の ‘牛’ (ngō, ngū) もシュメール語からの借入とする説があるが、これらの関係はなお不詳としなければならぬ。

3.5 現代英語の単語のうち印欧基語に遡るものには次のような語がある。予想されるように、日常生活に必要な基本語彙の多くを占めている。

1. 身体 arm, brow, ear, eye, foot, heart, knee, nail, navel, tooth
2. 家族 father, mother, brother, sister, son, daughter, widow
3. 動物 beaver, cow, goat, goose, hare, hart, hound, mouse, sow, wolf; louse, nit; bee, wasp; crane, raven, starling; fish, lax
4. 植物 alder, ash, asp(en), beech, birch, fir, hazel, oak, withy
5. 飲食物 bean, mead, salt, wine
6. 天体・自然現象 moon, star, sun; rain(?), snow, wind
7. 数詞 one—ten, hundred
8. 代名詞 I, thou, ye, it, that, who, what
9. 形容詞 cold, hard, hot, light, long, new, red, white, young
10. 動詞 be, come, do, eat, lie, murmur, ride, seek, sew, sing, stand, weave
11. その他(名詞) acre, ax(e), door, furrow, month, name, night, ore, summer, thatch, year, yoke

4. ゲルマン語派

英語の属するゲルマン基語が印欧語から分離し始めたのはおよそ紀元前 1500 年ころで、以後長い期間に亘って分化・発達を続け、紀元 5-6 世紀になって大抵現在のゲルマン諸言語が確立する。上述のゲルマン語派の四分説に対し、伝統的な分類では北海ゲルマン語群と内陸ゲルマン語群を一つにした西ゲルマン語群 (West Germanic) を認める三分説をとっている。確かに他のゲルマン語に対して、これらの言語の間にはいくつかの共通の言語特徴が存在する。しかしまた一方、北欧語と西ゲルマン語、ゴート語と高地ドイツ語に特有の特徴も認められるので、むしろ北欧語とゴート語を除いた残りが、ゆるやかな纏(き)まりをなしていたものとみるのが一番妥当かもしれない。(そこで本辞典で西ゲルマン語形を想定するときには、(WGmc) の表記を採用することにした。) ゲルマン基語の語彙をみると、印欧語時代に比べて社会生活の進歩、環境の変化が窺われる。とくに農耕・牧畜関係の語の充実と共に、航海・漁業関係の語が豊富であり (sail, sea, ship, keel, schooner, strand, ebb, swim, net, tackle, tow, etc.), 戦争関係 (bow, helm, shield, sword, weapon, etc.), 宗教関係 (god, heaven, hell, holy, werewolf, etc.) の語が目立つ。

5. Grimm の法則

5.1 これはゲルマン語派の諸言語と印欧語族の他の語派の諸言語との間に存在する子音推移を公式化したもので、ドイツの比較言語学者 Jacob Grimm (1785-1863) に因んで Grimm's Law とよぶが、また第一子音推移と称することもある。分り易くするために、印欧基語 (IE) の子音をほぼ保存するラテン語 (L) と移植したゲルマン基語 (Gmc) の音韻をもつ英語 (E) の例で示すと次のようになる。

1) IE の無声閉鎖音 p, t, k は Gmc で摩擦音化して f, þ (=th), χ (h) となる。

IE	L	Gmc	E
p	pater	f	father
t	trēs	þ	three
k	centum	χ	hundred

2) IE の有声閉鎖音 b, d, g は Gmc で無声化して p, t, k となる。

IE	L	Gmc	E
b	turbā	p	thorp
d	duō	t	two
g	ager	k	acre

3) IE の有声帯気音 bh, dh, gh は Gmc で帯気性を失い b, d, g となる。ただしラテン語 (L) では f, f, h (または消失), またギリシャ語 (Gk) では ph, th, kh となる。そこでギリシャ語の例も加えると、

IE	Gk	L	Gmc	E
bh	phrātēr	frāter	b	brother
dh	thūra	forēs (pl.)	d	door
gh	khēn	anser (< *hanser)	g	goose

この音韻法則に照らしてみれば、英語の foot, garden に対応するギリシャ語・ラテン語はそれぞれ pōūs, podós / pēs, pedis および khōrtos / hortus が正しく、前にあげた Lemon の推定が科学性を欠いた恣意的な臆説に過ぎないことが明らかとなる。

5.2 ところで、印欧基語とゲルマン語との音対応をさらに詳しくみていくと、そこに一つの問題が生じる。1) の規則に対して上例の L pater: E father の語頭の p:f は適合するが、語間の t:th の対応はどうであろうか。これは一見規則的のようだが、実は偶然の結果に過ぎない。というのは、father の OE 形は fæder で Gmc *fādēr に遡り、従って IE t:b: Gmc ð の対立を示すことになるからである。同様に IE p,k もしばしば f, χ(h) とならずにその有声音 b(v), g として現われることが分った。Grimm の法則に対してこれは重大な例外である。しかし 1875 年、デンマークの言語学者 Karl Verner (1846-96) はこれらの変化が印欧基語のアクセントの位置に帰因することを明らかにしたのである。すなわち、IE p, t, k は有声音の間にあっては、直前の音節にアクセントがあれば規則どおり無声の f, þ, χ だが、直前の音節にアクセントがなければそれぞれの有声音 b(v), ð, g として現われる。そこで father の IE から OE に至る発達の過程は次のように推定できる: IE *pātēr- > Gmc *fādēr > *fāðēr > WGmc *fāder > OE fæder。この場合、ゲルマン語派ではまず子音推移が部分的に行なわれ、その後でアクセントの語幹主母音への固定化が生じたことを前提としている。

5.3 ここでふれる余裕はないが、印欧語の母音についても、子音より複雑な形ではあるが、音韻対応が明らかにされている。これにより我々は、比較言語学の輝かしい成果である音韻対応によって、ある語の語源が正しいかどうかをチェックし、また表面的には類似の認